ベビーサインを習っている母子のコミュニケーションの様相

赤津純子
（埼玉学園大学人間学部）

問題：

ベビーサインとは、話し言葉を習得していない子どもに、簡単な定型化された身振りを教え、それを媒介としておとなと子どもとがコミュニケーションを図る方法である。この場合、おとなの側は話し言葉を添えて行う。ベビーサインを育児の中に取り入れている家庭の子ども（第一子）とその母親について、17 ヶ月間の追跡調査を行った。前言語的な活動から話し言葉へ移行していく過程の中で、ベビーサインがどのように使われているのかといくことを中心に調査した。

方法：

対象：生後 14 ヶ月の男児とその母親である。この子どもは生後 9 ヶ月からベビーサインを習っており、調査開始時点で、すでにベビーサインを使用していた。母親は妊娠前から、子どもが生まれたらベビーサインを用いた育児を行いたいと考えており、偶然友人の誘いによりベビーサインを習う機会が得られたとのことであった。

期間：生後 14 か月から生後 31 カ月までの 17 ヶ月間である。概ね毎月 1 回家庭訪問をした。都合により訪問できない時もあったので訪問回数は 14 回である。

手続き：母親への聞き取り調査（ベビーサインの内容、母子の会話の特徴、ベビーサインについてのエピソード、母親の感想、KIDS タイプ B の各項目、について尋ねる。）と母子のやりとり場面の観察（約 1 時間）を行う。

結果・考察：

母子が用いたベビーサイン､母親のみが用いたベビーサインの種類数の変化を図 1 に示す｡また KIDS タイプ B の「理解言語」「表出言語」「概念」の結果を図 2 に示す。

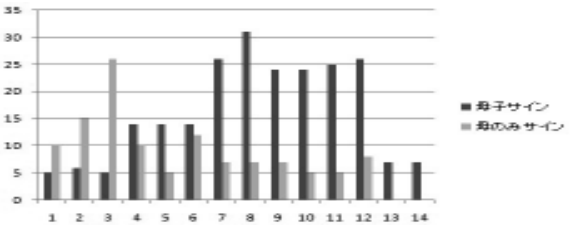

図 1　ベビーサイン（使用種類数）の変化

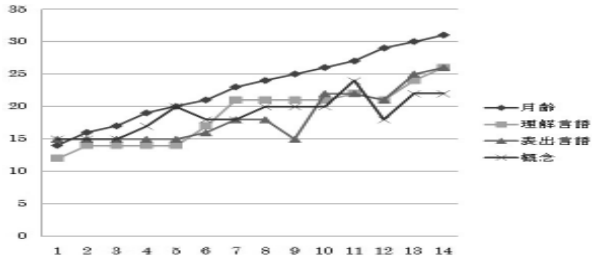

図 2　KIDS 結果　＊1 回目訪問時：生後 14 ヶ月、2 回目：16 ヶ月、3 回目：17 ヶ月、4 回目：19 ヶ月、5 回目：20 ヶ月、6 回目：21 ヶ月、7 日目：23 ヶ月、8 回目：24 ヶ月、9 回目：25 ヶ月、10 回目：26 ヶ月、11 回目：27 ヶ月、12 回目：29 ヶ月、13 回目：30 ヶ月、14 回目 31 ヶ月

使用するベビーサインの種類については 3 回目の訪問（生後 17 ヶ月）までは母親のみが使用するベビーサインの種類数の方が、母子が共通に使用する種類数よりも多い。KIDS の「理解言語」「表出言語」「概念」の 3 項目については、どの項目も月齢の標準を下回っている。

生後 17 ヶ月までは、子どもに対して母親は言葉を伴わせてベビーサインをしている。生後 19 ヶ月からは、母親がベビーサインで示さなくても、子どもは、母親の言葉を聞いたり対象物を見たりしただけで、それを表すサインができたり、サインで答えたりできるようになる。母親が単独で用いるサインの数はこの頃から減少している。生後 23 ヶ月では、母子が共通に使用するサインの種類数が増加する（その後は新しいサインはほとんど出現しなくなる）。また二語発話的なサイン（例：バナナが食べたい時に「バナナ」･「食べる」の 2 つのサインを続けてする）が見られるようになる。生後 29 ヶ月では言葉にサインを伴わせて使用する（例：自動車を見て「ブーブー」と言いながら自動車のサインをする）ようになる。生後 30 ヶ月からサインが急激に減少し話し言葉による意思疎通が中心となる。

母親は育児にベビーサインを用いたことを肯定的に感じている。「まだ話せない時に、子どもはサインを使って私（母親）に要求を伝えてきたので、私（母親）も子どもの要求がわかりよかった。言葉が話せないうちから、例えば犬や猫を見ると、「イヌ」、「ネコ」、などのサインをしていたので理解できているのだということがわかり感動した。」と述べている。